

ラオス現代文学…その誕生と傾向⁽¹⁾

ウティン・ブンニャウオン／鈴木玲子訳

ラオス現代文学の幕開けは、西側諸国の文学、なかでもフランス文学の影響に拠るところが大きい。それは、一八九三年にラオスがフランスの植民地になったことに起因する。本稿では、ラオスの現代文学の誕生と傾向を時代を追って順に述べていく。なお、本稿で述べる現代文学には小説・長編物語・戯曲・詩歌が含まれる。

現代文学の台頭は第二次世界大戦以降と、他の東南アジア諸国に比べて遅いと言える。フランス統治時代⁽²⁾は、まだ古典文学時代であり、バイラーン⁽³⁾に書かれたジャータカ物語⁽⁴⁾などが「語り」として受け継がれていた。その語り文学は、韻文形式で難解な言葉も多く、書物として目に触れることもなかったためか、一般の国民にとって身近なものとは言えなかった。その後一九二四年には初めて印刷技術が導入されたが、出版物は初等教育の教科書に限られていたという。

ラオス現代文学の誕生は、一九五〇年代としてよい。その源流をたどるには、ソムチン・ピエール・ギン(Somchine Pierre Nginn)(一八九二年生)を挙げるのが適切であろう。彼は、フランス国籍のカンボジア人男性とルアンパバーン出身のラオス人女性との

間の子で、幼少時代をラオスで過ごし、高等教育は主にフランスで受けた。一九一八年、在ラオスフランス総領事館勤務となり、必要性から独学でラオス語を学んだ。その後ラオスでさまざまな役職に就き、最後はラオス国会議長を勤めた人物である。彼は勤務の傍ら「パーワディー夫人」という小説を執筆した(一九六七年)。これは夫に完全に従う妻の姿を描いたもので、理想の夫人像として人気を呼んだ。また詩人としても活躍した。残念ながらラオス語で書いたものではないが、数編の詩を「DOKE CHAMPA」という一冊の詩集にして出版し、当時の知識人層に受け入れられた。また、ラオスの古典文学をフランス語に次々と翻訳した。一九五七年にはフランス文学協会から賞を受賞したと言われている。

同じ頃、高等教育機関の語学教育は、フランス語の他に、ラオス語の時間が設けられるようになった。そして高等教育進学者の数が増えるにつれ、フランス文学の読者数も増え、さらにはラオス語のもの書きになりたいと思う人を生み出すこととなったのである。このような背景を受けて一九五三年、フランス文学「La Mare au Diable(魔の沼)」をラオス風に改訂したラオス語版「ノーンピーペート」が爆発的な人気を読んだ。「ラオス風」とは、登場人物や地名をラオスのものに置き換えたので

ある。編者のクーケン氏は、ラオス文学委員会のメンバーの一人で、ヴィエンチャン市内の高等学校の初代ラオス語教師である。

一九五〇年代の終わりには、ラオスは、ラオス愛国戦線派とラオス王国体制派に二分されていく。文学界もこの二つの政治的流れをくんで作品が発表されていた。

ラオス王国体制派がまだアメリカの後押しを受けて主勢力を保ち、国が平穏であった頃、経済自由化のさらなる拡張を目指して各企業がさまざまな活動を行った。サワン保険会社によるラオス初の雑誌「ムアンラーオ」はこのとき刊行されたのである。一九五九年五月のことであった。実際は、企業宣伝や広告などが大半を占め、その中に文学作品が少し載っているという方が適切ではあるが、文学界にとつては画期的なことであった。しかも文学作品のほとんどがフランス文学を模倣したものであり、そのためか自らを「作家」あるいは「文筆家」と称するものはいなかったようである。この雑誌は二年で廃刊となるが、本誌を通して自分の作風を築いた「作家」として挙げられるのは、ドアンチャムパー（ダーラー・ヴィーラウオン・カンラニヤー）である。主な代表作品に「ひそやかな灯火」「八キロで待つ」などがある。

一九六〇年代に入ると、タイの雑誌や本が大量に入ってくるようになり、タイやアメリカ、フランスの文学作品が図書館にかかれるようになる。本に関心を持つ者も増えていった。そのような中、五、六カ月で廃刊となる短命のものもあったが、ラオス語日刊新聞や週刊新聞が次々と刊行され、その結果、多くの文学作品

が発表されるようになった。なかには数カ月にも及んで連載される長編作品もあった。執筆者は、先のドアンチャムパー、その他には学生である人も多く、その内容は恋愛ものや貧富の差による不平等や社会矛盾を扱った若者らしいものが多く見受けられる。代表的な作品にドークケート（ドアンドウアン・ヴィーラウオン）の「ハックの花の壁」、ナックキアンニン（マリトリー・スィーニャウオン）の「森の星」がある。さらにベテラン作家の作品としてドアンチャムパーの「誰の子?」、ポー・トリチャー（フリーサー・トリチャー）の「幼な子」（いずれもサートラーオ紙掲載）が挙げられる。文学に対する国民の関心が高まってきたことを受けて、筆者自身も文筆活動を始めた。また先に挙げた「誰の子?」を単行本として出版することを決めて、ラオス文学界に単行本を登場させた。

こうして一九六八年以降、ラオスでは新進の作家による短編小説が新聞に掲載されるだけでなく、単行本として次々と発表されるようになる。それらの作品を検討すると、その殆どが恋愛小説や娯楽小説や surprise ending 類の小説なのである。これは西側諸国の文学作品を大量に読むことが可能になり、なかでもモーパッサン等、フランスの作家の作品がこの時代に好んで読まれていたということの影響であると考えられる。

以上のことから、ラオスの現代文学は一九六〇年代に国民の支持を得て隆盛期を迎えたということができよう。諸外国の作品の影響を受けており、この時代のもものは「ロマンチズム」類の文学作品が多かったとも言える。

一方で、一九六〇年代後半以降、支持者を確実に徐々に増や

していったラオス愛国戦線派側からも文学作品が数多く文壇に登場する。当初は小説よりも詩歌、なかでも韻文の定型詩が多かった。代表的な作家にプーミ・ヴォンウィット、ソー・デーサーなどがある。愛国心や民族統一、貧富の差や身分階級の差による社会悪の批判、国家としてのアイデンティティーを鼓舞する内容が特徴であった。一九六九年には、カムリエン・ボンセーナーによる「スイーノイ」という小説の単行本が発刊される。これは、地主と農民である主人公の間に見られる身分階級による社会矛盾を指摘し、最後には主人公が革命の闘士になって農民達を救うという内容である。当時国民の殆どが農民であったラオス社会にあつて、多くの共感を呼んだ作品であつた。

一九七〇年代に入つて、愛国戦線側、即ち開放戦線側の文学活動が一層盛んになる。なかでも多くの読者を魅了した作品に、チョー・ドアンサワン（スワントーン・ドアンサワン）の「人生の道」という作品が挙げられる。これは、彼自身の体験をもとにして語られた作品であり、この作品以降、実話を題材にしたリアルな作風が主流を占めた。まさに「リアリズム」の到来である。

一方の王国体制派は、一九六〇年代末の単行本の単発的な発刊を経て、一九七〇年代には文学作品だけを集めた文芸誌が発刊されるようになる。「クアンファン」（一九六九）、「プアンケーオ」（一九六九）、「ピムラーオ」（一九七二）、「ナーン」（一九七二）、「パイナム」（一九七二・六）などがあつた。なかでもマハーシーラー・ヴィーラウォン代表の「パイナム」は国民の支持を得、息の長い雑誌となる。そしてこの雑誌に発表したバーナイ、ドアンチャムパーなどの作家達はパイナム派と呼ばれるまでにいた

る。雑誌を通した文学活動が一つの「派」として文学界を築き上げたところまでいたつたのである。

一九七二年には、パイナム派を中心とした多くの文学者達による短編小説集が数冊相次いで刊行される。従来は同一人物の単行本のみであつたことから考えると、文学者同士の交流が盛んになってきた証拠であり、画期的なことである。同年、彼らは作家協会を設立し、その設立記念誌として「ファーマイ（新しい空）」を発刊する。彼らの文学作品は、先の開放戦線派の文学作品と同様に社会矛盾を追求した内容のものもあるが、表現は婉曲的で、飾り言葉をふんだんに採り入れた文体となつている。また、同じ一九七二年に法律学校を卒業した異色派ヌムパーカーヒアン派は、滑稽本を次々と発表した。一見単なる笑い話のようであるが、実は社会を風刺したものである。

王国体制派の作家達の文学作品の傾向は、前述したように総じて恋愛ものや夢物語風で、たとえ社会批判や社会風刺を題材にしたものであつても、その表現は婉曲的であつたり、表現の美しさへの追求に重点を置かれたものが多かったが、徐々に農民の実生活を描写したものとリアリスティックな作風が変わつていった。それでも今一つ解放戦線派のような写実的な描写に欠けていたのは、当時の作家の執筆環境が大変に厳しかったことにある。国家出版局はなく、政府は文学について何の関心も示さなかつた。しかも作家達が苦勞して印刷所に頼み込んで自ら印刷代を出してやっと出版しても、考え方の固い危険人物として見られたりした。従つてまだ作家として独立する人物はなかつた。一方の解放戦線派が文学界を後押し、文学作品によつて大衆の支持を得たのとは好対照である。

一九七五年二月二日の解放によりラオス人民民主共和国が成立すると、弾圧を恐れた多くの王国体制作家が海外に流出した。しかし一方で、約半数の作家達がラオスにとどまったとされる。穏健な解放側は、彼らに引き続き公務員の職務を与えたりするなど、特に弾圧は行わなかった。この結果、これまで2つの政治の流れを組んだ文学派は一つに統合されることになる。

その後の文学活動の中心の場合は情報文化省である。長老格であったソー・ブツパーヌヴォンが牽引車となつて、当時帝国主義に対抗して戦った歴史上意義深い資料をもとに、執筆活動が行われた。革命家の勇気や国家にとつて意義深い勝利の数々を国民に知らせるため、その当時の単行本の発刊数は初版で七千冊や一万五千冊であつたと驚くべき記録があり、新政府は出版活動を重要視していたことがうかがえる。これらの文学作品は主に記録小説としての色彩が強く、真偽を問わずあたかも事実であるかのように書かれたものが多い。その殆どは現体制を擁護するものであり、国営印刷所や国営書店に専属の作家が所属する形で文学作品が発表されていった。こうして一九七〇年代―一九八〇年代には作品はフィクションものが姿を消し、革命や国家建設を題材に採ったノンフィクションものが多くなつた。

革命小説の中には、第一巻を刊行した後、しばらくしてさらに続編を執筆したものが多く、例えば、ソー・ブツパーヌヴォンによる「二番目の軍隊」は結局全部で四巻本となり、「二姉妹」は二巻本となつた。チャンティ・ドアンサワンの「人生の道」も第二巻と第三巻が後から加筆された。一方、ホムパンの「暗黒の

明るさ」、ダーオヌアの「人生の嵐」、ウティン私自身と他の編集者による革命家の伝記「偉大な勇士の声」は単行本として刊行された本である。また革命小説とは別に、国家建設や新しい人生設計をテーマにした短編小説も多く執筆された。一九七〇年代―一九八〇年代に情報文化省出版局に所属していた代表的な作家は、ドアンチャムパー、ポー・チュンラモンティ、ウティン・ブンニャウォン、ポー・ブアンサバー、ブンタノーン・ソムサイボンなどである。また、他の局に所属していた作家に、カムプイ・ルアンバスイー、ドークケート、ウイセート・サウエーンスックサー、フンアルン・デーンウィライ、ブンスーン・セーンマニーなどがある。その後戦いをテーマにした内容ではあるが、単なる記録小説や政治的色彩の強い作品ではなく、トルストイ（ロシア）やミッチェル（アメリカ）などの作品に影響を受けた短編小説が出される。ラオスの文学作品の内容は、このように常に諸外国の文学作品の影響を受けていたと言つてよいであろう。しかしながら戦いをテーマにした文学作品は、読者の心を引きつけることはなく、販売冊数もあまり伸びなかった。このようなことから考えると、文学史上重要な文学作品はまだ出ていないといつてよい。

一九八八年の新思考政策によつて経済開放化が進み、文学活動もまた多様な内容の文学作品が発表されるようになる。もはや単なる戦争ものは読者の支持を得ることが難しくなり、新たに古典物語の復刻版や韻文文学の散文版、また社会問題や環境保護などに関する文学作品が出版されるようになる。しかし、政府は依然として革命に活躍した偉人伝の出版を促進しており、文学作品のコンテストの上位入賞作品は常に戦いをテーマにし

たものであった。

その後、新聞記者を含むラオスの文筆家達は、自分たちを文化の闘士と呼んだ。それは、ペンを武器に社会の平和や幸せのために戦う、ということの意味していた。けれども社会批判や現社会を脱却する社会改革などを述べようとして極論に走るあまり、読者達の作品に賛同する気持ちをかえって失わせてしまった。その結果、逆に文学作品はただ事実だけを叙述するようになり、読者に感動を与えるような作品、抽象的な内容の作品があまり見られないように思う。

ラオスの文学活動は諸外国に比べると、かなり遅れをとっていると言えるかもしれない。表現方法にしても、作家達の文筆家としての経験が浅かったり、全ての国民に受け入れられることを意識するあまり、単純な技法で書かれたものが多い。しかしながら数多くの作家が再び発表の場を得て、新しい文学界の潮流を築こうと夢中なのである。逃げ出せない米びつの中にあって、必死に諸外国の文学状況に追いつこうとしているように見えるかもしれない。

訳者注

(1) 本稿は、一九九七年七月二二―二三日 タイ・バンコク・チュラロンコン大学文学部主催「ラオス文学とタイ文学との関係セミナー」で発表した原稿に修正加筆をしたものである。

(2) 一八九三―一九四九年

(3) ニッパ椰子の葉。細長く紙のようにはした葉に鉄筆で文字を刻み、樹皮な

どの黒い煮汁を流し込んで文字を書いた。

(4) 釈迦の前世物語。釈迦が国王、商人などさまざまな姿をかりて、種々の善業、功德を行った説話を収録したもの。

参考文献

- Amis du Royaume Lao, No. 4&5 (1971)
- Caleunlangsy, Bukaw (1993) 'kaan patiwat laaw lae wannakhadee patiwat' (second edition)
- 'Mueang laaw' Vol. 7 (1959, 11)
- Ngim, Somchue (1967) 'naang phaawadee' khana kammakaan wannakhadee
- Paanay (1971) 'kawii saaw baan'
- Phay naan' Vol. 6, 7, 8, 10 (1972-1973)
- Thawken (1953) 'noong phii pheet'
- Vientiane Pedagogical University (**) 'pawat kaan suksaa laaw'
- Vongvicit, Phumi (1987) 'khuam songcam khoong siwit haw' Sathabhan khonkhwa wihanyasaat sangkhom.

ウティン先生の紹介

ウティン・ブンニャウオン氏 (一九四五―二〇〇〇年・男性)

一九四五年、ラオス人民民主共和国サイニャブリー県生まれ。一〇才のときに首都ヴィエンチャンの親戚の家に移り住み、家の手伝いをしながら学校へ通った。処女作品は、一九七三年、女性の強さ・美しさなどをさまざまな女性をとり挙げて描写した「女性の女性」。以降、国家出版局に編集委員として勤務する傍ら作家としての道を歩み出す。

一九八〇年代後半から九〇年代前半、当時の「ワンナシン誌」

等の文芸誌に「異常な死に方」「ジャール平原からの声」「ココナツ殻の財産」「灰」など、次々と短編小説を発表し、執筆活動も佳境に入っていく。なかでも一九九一年に出版した「お母さんー短編小説集」は、わかりやすい現代語で、母の尊い愛情や貧困の中でも忘れない友情、美しい自然描写などが国民の共感を呼び、作家としての地位を不動のものとした。一九九二年にはフリーとして作家活動に専念。執筆の傍ら、ラオス作家協会の設立、同協会の「シアンケン紙」発刊に心血を注ぎ、作家仲間の中でも、常に指導者の立場でラオスの文学界を引っ張って来た人物である。氏の作品は、これまでにロシア語ベトナム語タイ語、そして昨年、英語に翻訳出版されている。また近年は、一人でも多くの子供にラオスの古典文学を知ってほしいという願いから、ラオス古典文学を子供向けの言葉になおす運動を繰り返し広げていた。ラオス伝統文化についての造詣も深く、手工芸品・民芸品保存の様々なプロジェクトの相談役でもあった。

一九九八年四月、東京外国語大学外国語学部東南アジア課程ラオス語専攻、総合文化講座の助教授として来日。ラオス語の他にラオス文学史、古典文学に見るラオスの伝統文化等を講義していた。その温厚でやさしい瞳の中にもラオスへの熱い想いが伝わる講義と人柄は学生の絶大な信頼と人気を得ていた。

ウティン・ブンニャウォン先生は病氣療養中、二〇〇〇年一月三〇日他界されました。ここに慎んでご冥福を心よりお祈りいたします。

(鈴木玲子・記)



ウティン先生著書の数々



ウティン先生近景

